

〈自由投稿論文〉

戦争原因の研究Ⅱ

—人類史の中の暴力の起源—

岩木 秀樹

Studies of the Causes of War II :
Origins of Violence in Human History

IWAKI Hideki

要約

まず、戦争の定義を広義にとらえ、惑星的視点で戦争と平和の問題を捉える。

攻撃は動物一般に見られる行動であるのに対して、同一種間の暴力は主として人間に見られる行動である。類人猿と人間の相違点から戦争原因に迫り、人間の社会性や抽象化能力が戦争原因に関与していることを分析する。

さらに本能説からの戦争原因を批判的に考察し、本能の曖昧性、セビリア声明や人類学からの批判を見ていく。もし本能により戦争が起こるのならば、戦争は人間の宿命であり、平和への努力は無意味になってしまう。

最後に、人間が共同、協力、利他を求める動物であり、それによる戦争低減化の可能性を展望する。

キーワード 戦争原因、暴力、ビッグ・ヒストリー、類人猿、人間、本能、利他

はじめに

本稿では、まず戦争の定義を広義に捉えて、ビッグ・ヒストリーの観点で戦争を説明し、惑星的視点で戦争と平和を見ていく。次に、類人猿と人間の相違点から戦争原因に迫り、人間の社会性や抽象化能力が戦争原因に関与していることを分析する。さらに本能説からの戦争原因を批判的に考察し、本能の曖昧性、セビリア声明や人類学からの批判を見ていく。最後に、人間が共同、協力、利他を求める動物であり、それによる戦争低減化の可能性を展望する。

1. ビッグ・ヒストリーから見た戦争

歴史家のクインシー・ライトによれば、「最も広い意味での戦争の定義は、星の衝突や動物どうしの争い、原始部族間の闘いなどの暴力的接触」としている (Wright 1983:5)。この定義によるならば、宇宙の誕生以来戦争が存在していたことになる。しかしライトも一般的な戦争の定義としては、国家のような政治集団間の争いで、長期かつ大規模な敵対行為を伴うものとしている (ライト 1974:537)。このように基本的には戦争の定義は後者のようなものが一般的であろう。

だがここでは、あえて戦争の定義を最大化し、長い歴史の中でビッグ・ヒストリーの観点から戦争を見ていき、戦争にやや違った視点を加えていくことにする。

ビッグ・ヒストリーとは、138億年前に起こったといわれるビッグ・バンによって宇宙が誕生してから今日まで、さらには宇宙が消滅するまでを視野に入れた壮大な歴史である (中西 2014:14)。また宇宙の起源にまでさかのぼって、時間の全てにわたる歴史を再構築する試みである (Christian et al. 2014:3=2016:4)。

ビッグ・ヒストリアンの D. クリスチャンによれば、今までの歴史では、王や貴族による戦争などが中心に描かれていたが、そのような歴史観は限界

に來ている。国家や時代によって分割された暗記中心の歴史から、宇宙の始まりから未來までも包含した大きな歴史が必要とされている（『朝日新聞』2015.3.13）。

現在、戦争や環境破壊、貧困・格差の問題、精神の荒廃等の諸問題が地球上を覆っている。今までのたこつぼ型の一つのディシプリンでは問題解決は難しくなっている。また排他的な領域を前提にした国民国家システムが機能不全に陥っており、領土争いや分離・統合問題が台頭している現在、長く広い視野で歴史を考えることは有効であり、国民国家や民族の相対化につながろう。

ビッグ・ヒストリーにより時期区分をするならば、以下のようになろう。第一の時期は、約 138 億年前のビッグ・バンから約 40 億年前の地球における生命の誕生までの時期で、「自然現象の時期」である。第二の時期は、生命の誕生から約 20 万年前のホモ・サピエンスの誕生までの時期で、「生命の誕生と多様化の時期」である。第三の時期は、ホモ・サピエンスの誕生から約 1 万年前の農耕の開始までの時期で、「新しい生物・人間の誕生の時期」である。第四の時期は、農耕の開始から約 200 年前の近代世界の成立までの時期で「農業革命による脱食物連鎖をする人間の時期」である。第五の時期は、近代世界の成立から現代までで、「近代化の時期」である。

ライトの星の衝突などの暴力的接触も戦争の定義に入れるとするならば、まさに宇宙や地球、生命の歴史は、戦争の歴史といっても過言ではない。そもそも宇宙や地球の成り立ちはこのような暴力接触によるものである。また 6500 万年前の隕石の衝突により恐竜が絶滅したことも文字通り暴力的接触である。隕石の衝突がなければ恐竜は未だに地球最大の生物として君臨している可能性があり、その結果、哺乳類は小型のまま、人類が誕生することもなかったかもしれない（Alvarez 2017=2018:41）。

このようにビッグ・ヒストリーによって新たな知見を得ることができ、また長い歴史から現在の国民国家やナショナリズムをも相対化できる。歴史とはナショナル・ヒストリーではなく、宇宙、地球、生命、人類の 138 億年におよぶ歴史によって枠づけられるものである。そのような観点から、現在、地球の安全保障と人間の安全保障が最も差し迫った課題であり、国家の防衛

ではなく、地球の防衛が重要なのである (Gustafson 2017:158, 160)。国連をさらに発展させることや世界政府などよりも、はるかにラディカルな惑星的思考による世界観を確立することをビッグ・ヒストリーは志向している (Rodrigue 2017:208)。

ビッグ・ヒストリーの観点から戦争を見ていくと、壮大かつユニークなものとなる。長く広い観点で現在の戦争も考察でき、人類史的、惑星的視点から平和の問題を捉えることができる。だが一方で、戦争の定義がぼけてしまうことになり、人類史の中での戦争を明瞭に見ることができない。したがって、戦争は政治集団間の組織的な暴力として、ここでは扱っていくことにする。

2. 類人猿と人間の暴力

(1) 動物の攻撃と人間の暴力

ここでは、動物と人間、特に類人猿と人間の暴力の問題を見ていき、その相違点から戦争の原因に迫りたい。

まず攻撃と暴力は区別しなくてはならないであろう。攻撃とは多くの種に見られる動物に普遍的な行動である。また攻撃は多くの動物とともに人間が生来的に持つ資質であるが、生物の生存競争の一環にとどまる限りでは暴力ではない。自らの生命やなわばりを守ったり、獲物をとらえたりすることは、自然の生命活動であって、暴力とは言わない。このように人間の攻撃性は他の生物にも共通したものであり、動物と人間には連続性がある。生命維持の自然活動である限り、それには悪というレッテルを貼ることはできないであろう (伊藤 2001:9-10, 小林 2008:20-21)。

これに対して、暴力という言葉は、人間から動物への使用も多少はあるが、基本的には人間同士に使う用語であり、してはいけないこと、悪であるという意味が含まれている。攻撃は文化ではなく、動物一般に見られる行動であるのに対して、暴力は人間に典型的に見られる文化的行動なのである (伊藤 2001:10-12)。

(2) 異種と同種間の争い

現代の生態学や行動学では、異なる種と同じ種内の争いとは、違う性質をもっていることは常識である。肉食獣のライオンやオオカミが獲物を狙うのは、食欲から発する行動である。同種の仲間を攻撃するのは、テリトリーをめぐる争いだったり、交尾相手をめぐる葛藤が原因だったりする。しかし獲物を狙うのと同じ方法で同種の仲間を攻撃することはない。獲物は効率よく仕留めることが重要だが、同種の仲間を殺すまで攻撃する必要はない。争いが起こった原因を取り除くか、自己主張を相手に認めさせることが目的だからである。そのため同種の仲間に対する攻撃には、相手が納得すれば攻撃が抑えられるようなルールがある。

同種の動物どうしの争いは、相手を抹殺することではなく、限りある資源をめぐるいかに相手と共存するかを模索することにある。その限りある資源とは食物と交尾をする相手である。自らの生命を維持し、子孫を残すために、動物は争いを起こす。山極は、人間社会に見られる争いごと、もともとそういった食と性をめぐる葛藤から生じたのではないかと示唆している(山極 2007a:34-36)。

多くの動物において、種内の攻撃行動は、敵に傷害を与えないように儀礼化されている。同一種内の殺害を禁じることは先天的要素であり、殺害を命じることは文化という後天的要素に由来すると考えられる (Eibl-Eibesfeldt 1975=1978:49-430, 油井 2004:72)。ストーリーによれば、自分自身の種のメンバーを殺す習性をもった脊椎動物は他にいない。同じ種の仲間に残虐行為をして積極的な喜びを感じない動物は人間だけである。私たちはかつて地上を歩いたものの中で、最も残忍で無慈悲な種なのである (Storr 1968=1973:11, 小林 2008:22)。

しかし同種内での殺害の例は動物の中でも、若干存在する。それは霊長類やライオンのオスによる子殺しである。オスによる子殺しは、オスが自分の子孫をたくさん残そうとした結果である。他のオスの子どもを排除し、子を殺されたことによりメスの発情を早め、自分の子どもを確実に残そうという繁殖戦略として理解できる (山極 2007a:34-35)。子殺しは確かに同種内の殺し合いではあるが、性と生殖に関わる個体の繁殖を目的とするものであり、

広い意味での動物の攻撃行動であり、人間の戦争とは異なるものであろう。

だが近年の研究では、ある種の動物が同じ種の動物を殺している例が記録されるようになってきている。特にライオン、オオカミ、ハイエナ、アリのような社会性を持つ種の場合、良く組織された集団攻撃という形で、隣の群れを殺戮する場合がある。さらに高等な類人猿であるチンパンジーもゴリラも人間の平均値と同程度には仲間に殺されていることが指摘されるようになった (Diamond 2014=2017:283-284)。また哺乳類では、社会的な動物ほど、脳が大きいことが報告されている。特に霊長類では、群れのサイズが大きいほど、大脳の新皮質が大きくなる傾向がある (更科 2018:165)。これらのことから社会性や人間に近い高等な知能も争いの原因と考えられるであろう。

相手を死に至らしめる集団間の致命的な暴力は、人間とチンパンジーが共有しており、他方、集団間の友好は人間とボノボ (ピグミーチンパンジー) が共有している。このように、人間は相反する二つの性質を具有している。ただその獐猛なチンパンジーですらも、戦うときは、忍びより、非力な相手を見つけだして不意打ちを食わせるが、相手が強そうだと手を出さずにさっと引き上げる、というスタイルをとるので自分たちの損害はほとんどないのである。このようにチンパンジーも、自身に被害が及ぶような危険を冒さないのである (加納 2001:70,78)。

現実的に、動物が大量虐殺や長期間にわたる戦争を行ってきたわけではないので、動物の争いと人間の戦争を分ける必要があるだろう。ただ戦争の原因としての社会性と抽象化能力は、類人猿と人間の違いの箇所では後に論じる。

(3) 類人猿と人間の相違点

生化学者たちは DNA の塩基配列を比較する方法を次々に開発し、類人猿と人間との遺伝的距離が、類人猿とサルとの違いよりも小さいことを明らかにした。なかでもチンパンジーとボノボが最も人間に近縁で、人間はチンパンジーとの全塩基配列の約 1%、ゴリラと約 2% しか違わない。最近ではアフリカの類人猿と人間を同じ科に入れ、ヒト科に分類しようとする意見が強くなっている。このように人間が生物学的に類人猿とわずかしかなかったという事実が次第に明らかになってきた。

また人間家族の成立条件は、インセスト・タブー、外婚制、分業、コミュニティの4つであるが、このうち分業を除く3つの条件がすでに人間以外の霊長類にも見られていると考えられている。今まではインセストの禁止は人間社会のみに見られる独特な規範と考えられてきたが、現在は人間と動物の社会を区別する特徴ではなくなっている（山極 2007b:20-21, 184）。

このように類人猿と人間の連続性を研究することにより、人間の行動や暴力の問題を原初に立ち返って考察でき、さらには戦争の原因の一端を類人猿の生活、生殖、集団性の中に見いだすことも可能となろう。だが現実的には連続性と戦争原因との関係はうすく、類人猿が行う限りある資源をめぐる争いは、直接戦争につながるものではない。

今まで見てきた類似性ととも相違点も見なくてはならないであろう。むしろ戦争の原因という観点では、類人猿は戦争をしないが人間はするので、その相違点に戦争の原因が隠されている可能性が高い。

まず生活史の観点で現代人と類人猿を比べてみると、大きな違いが3つ存在する。それは子ども期があること、青年期があること、閉経後何年も生きることである。子ども期はすでに離乳しているのに一人前の食事ができない時期である。青年期は繁殖力があるのに繁殖できない時期を指す。人間の特徴である閉経という現象は、子ども期を支えるように進化したという説がある。人間の女性は閉経を前倒して、自分で子どもを出産するよりも、すでに生まれた子どもの成長や、娘や息子たちの出産と育児に手を貸すことで子孫の生存率を高めようとしたのかもしれない（山極 2007b:194-195）。これらの相違点は、人間が社会性、協同性をもった動物であることを示すものである。

現生の類人猿が熱帯雨林から出られなかったのは、肉食動物が多い地上で生活できなかったからである。初期人類がなぜ地上の生活に適した特徴を身につけるようになり、やがて樹木のないサバンナへ進出するようになったかは謎である。しかし山極によれば、その理由は直立二足歩行^①という移動様式と家族という社会性にあると考えられる。生態的な理由で発達したこれらの特徴が、後に言語を生み出し、さらに人間に独特な暴力を生み出す基礎となったのであろう。

二足歩行により、前足である手が自由に使えるようになり、道具を生み出し、その影響で脳が発達する。臨機応変な採食行動を獲得し、他の動物が手を出せない食物を手に入れるために、大きな脳^②が役に立つようになった。肉食動物を出し抜いて獲物をさらったり、石器で骨を割って骨髓を取り出したり、棒で固い地面を掘って根茎類やシロアリなどを掘り起こしたり、記憶力、洞察力、応用力が必要になったのである(山極 2007a:195-198)。

人間が直立二足歩行と大きな脳を進化させるために背負った負債を、親以外の仲間の手を借りて軽減しようとした。それが人間のユニークな社会性、協同性を作った。この社会性は大きな分岐点となり、戦争の原因ともなるであろう。このことは、チンパンジーの戦いと人間の集団間の戦いには明らかな違いがあることからわかる。チンパンジーのオスたちは自分たちの利益と欲望に駆られて戦いを起こしているのに対し、人間の戦いは常に群れに奉仕することが前提となっている。人間の戦う意味は、家族を生かすため、共同体の誇りを守るために、傷つき死ぬことである。チンパンジーは死を賭して戦うことはないのである(山極 2007b: xii, 山極 2007a:221)。

言語の使用も人間の大きな特徴である。言語により物事を抽象化するようになり、様々なイデオロギーが後に生まれた。また言語は超越的なコミュニケーションを可能にし、そこにはない出来事や空想上の話を伝える機能がある。実際には見ていないこと、聞いていないことを体験させ、それを仲間でも共有することも可能である。この機能によって、言語はヴァーチャルな共同体をつくりだした。さきほどの社会性が融合され、後に国家や民族などの幻想の共同体が人々の心に宿るようになり、しばしば戦争への道を進むこともあった(山極 2007a:222-223)。

このように社会性、言語の使用は人間の人間たるゆえんであり、高い文化を創り出した原動力であったが、反面、戦争の原因ともなったのであろう。

3. 戦争は本能か

(1) 心理の外在性と拘束性

ここでは、戦争原因を生得的な攻撃本能に帰するアプローチを検討する。

ユネスコ憲章の前文には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とある。このユネスコ憲章や世界人権宣言、そして日本国憲法も、第二次大戦の言語に絶する惨禍と反省により、世界の永久平和を希求する人類の高き英知の結晶である。相手への憎悪が人の心理で発生し、戦争に人間の心理が何らかの関与をし、戦争を増幅させていることは確かであろう。極端に言えば、心理が全く関与しない戦争は考えられない。戦争は人間が作り出すものであり、人間が存在する以上、人間の心理は密接な関連を持つ。

だが、戦争の原因を心理のみにもとめるのは性急であり、社会性、時代性、地域性など多面的に原因を検討しなければならない。私たちは、人間の心理や欲望、動機が社会に何らかの影響をもたらす社会の創造者であるのと同時に、環境や社会がある特定の心理を形成する社会の被造物なのでもある。個人意識は集合意識の外在性と拘束性により形成される側面もある(Durkheim 1895=1973, Giddens 1989=1992:670)。また戦争を欲していない人も戦わざるをえない状況や社会構造、社会制度も考慮しなくてはならないであろう。

(2) 本能としての戦争

戦争原因を個人心理のなかの特に攻撃本能に求める者としてフロイトがいた。彼は攻撃性が破壊しざることをできない人間本性の特色であると述べ、セックスと共に攻撃性を人間の本能であるとした(Freud 1968:62-80)。彼は20世紀初頭、初めて性本能の重要性を発見し、当初はそのことのみしか注目しなかったが、1915年以降、第一次大戦の影響を受けたこともあって、攻撃本能についても語るようになった。しかし彼はその破壊的側面しか見ることができずに、1920年代に入ると、死の本能という仮説を作り出した(Tournier 1977=1980:19)。

フロイトとは異なり攻撃本能の建設的側面を見る心理学者にトゥルニエがいる。彼によれば、攻撃性はフロイトのリビドーと同じく生命力の一つの現われであって、その意味では誰の中にもあるものであり、それ自体良くも悪くもない。したがって、それから出てくる暴力も直ちにその善悪、当不当を

断じ難い。しかし、ひとたび攻撃性が私利私欲と結ばれ、己れのために力と権力を獲得する手段として用いられるようになると、攻撃性は諸悪の根源となり、悪質な暴力が発生する (Tournier 1977=1980:333, 訳者あとがき)。

このように心理学者であるトゥルニエにしても、攻撃性そのものが戦争を引き起こすのではなく、私利私欲や権力が媒介となって起きることを指摘している。本能や心理的なものが直接、戦争を生み出すのではなく、ある媒介や契機があって戦争は起きるのである。

フロイトにもトゥルニエにも言えることは、本能という言葉のあいまいな使用である。そもそも本能とは、一般には動物のそれぞれの種に固有で、合目的性のある経験を必要としない生得的な行動を生む内的な傾向ないし力であり、今日では厳密な学問用語としてはほとんど用いられなくなっている。本能概念は実のところ説明すべき事象を単に本能という言葉に置き換えた一種のトートロジーにすぎない。現象の数だけ本能を数えあげることができるので、科学的用語としては、無意味である (奥井 1984:1249-1250)。

(3) 本能論への批判

1986年にスペインのセビリヤで開かれた「脳と攻撃」に関する第6回シンポジウムで発表された「セビリヤ声明」は、1989年のユネスコ総会で普及促進が決定された。この声明を要約すれば、次のようになる。①動物が他の動物を襲うのは肉体的必要を満たすためであり、本能的に他の動物を「攻撃」するのではない。②暴力は遺伝ではなく、人間の性格は遺伝と環境によって決まる。③生物進化の過程で人間がより攻撃的になったという証拠はない。④「暴力的な脳」というのは存在しない。⑤人間は本能によって戦争をするのではない (油井 2004:112, Adams 1989=1996)⁶⁾。

戦争の原因を本能のみに求める研究者は、本能を重視する生物学者、心理学者、社会心理学者のうちでも少数である。もし本能により戦争が起こるのなら、生物的存在でもあり、何らかの本能的なものを有しているであろう人間は、いついかなる場合でも必ず戦争を行うことになる。また戦争は人類にとって宿命であることになり、平和への努力が全くの無駄になってしまうことになる。安全保障研究者の石津朋之によれば、戦争本能論は、人類は人類

であるがゆえに戦争が生起するということになり、なぜ戦争が別の場所ではなくここに生起したのか、なぜ彼らではなく、我々が戦争に関与したのかといった問題に対して、何ら有効な回答を見出し得ない。またある戦争の決定が人類の意志、例えば政府によって自発的かつ意識的に下されているという事実を説明できない（石津 2004:31, Brodie 1973:339）。このように、人間が必ずしも常に戦争を行うのではない。人間は本能によって戦争を行うのではないということを証明するのに、次のように人類学は多くの示唆を与えている。

(4) 人類学の観点

人類学的研究によると、葛藤や闘争は至るところで起こっており、人はしばしばそれを不可避なものとするが、それが表出される仕方や引き起こす反応については不可避なものはない。例えば、インドのムルス族は意見の相違が起こった時、祈祷師を呼びすべての決定を彼に任せる。コロンビアのサンタ・マルタでは二人の間の苦情は当事者が棒を持って岩や樹に行き、侮辱的な言葉を吐きながら、岩や樹を叩き、先に棒を折った方が勝利者となる。ブリティッシュ・コロンビア及び合衆国西北部のネイティブ・アメリカンの間では、論争はポトラッチとして知られている制度によって通常解決される。この制度では論争の勝負は、可能なかぎり多くの財産を破棄または破壊することによってつけられる。

このように対立、葛藤が生じた場合、個々の文化集団において解決法は異なる。つまり対立、葛藤が必ずしも物理的暴力を伴うものではなく、個人が第三者に委託するか、あるルールを伴った儀式を行うか、財産の放棄で戦うかは、その属する集団の伝統や慣習により異なる（Klineberg 1964=1967:12-14）。

以上のように、攻撃行動が文化により多様な違いを見せ、初期人類社会や現在のいわゆる未開社会には戦争が存在しなかったとすると、戦争原因を攻撃本能にのみ求めることはできなくなる⁽⁴⁾。

4. 協力と利他

霊長類研究者の山極寿一は現代の暴力や戦争を止めるためには、人間の持つ能力をもっと積極的に活用するべきであるとして、以下のように主張している(山極 2007a:227-228)。人間の社会性を支えている根元的特徴とは、育児の共同、食の公開と共食、インセストの禁止、対面コミュニケーション、第三者の仲介、言語を用いた会話、音楽を通じた感情の共有などである。霊長類から受け継ぎ、それを独自の形に発展させたこれらの能力を用いて、人間は分かち合う社会を作った。それは権力者を作らない共同体であり、もう一度この共同体から出発し、上からではなく下から組み上げる社会を作っていかなばならない。人間は多産性を獲得して以来、共同で育児をすることを社会の中心に据えてきた。食の共同も、インセスト・タブーも共同の育児に深い関係を持っている。共同の育児という教育によって、人間の子どもたちは多様性と可塑性を身につけることができるようになった。このことをうまく活用すれば戦争の低減化にも寄与できるであろう。このように共同性は人間にとって重要であり、平和を維持する一つの要因ともなろう。

また同調性は、他者との調和の最も古い形で、自分自身の体を他者の体に重ね合わせ、他者の動きを自分自身の動きにする能力に基づいている。だからこそ、誰かが笑ったりあくびをしたりすると、私たちも笑ったりあくびをしたりする。これらの同調性はサルや人間の新生児の段階にも見られる。

だが、異質に見える人や別の集団に属していると思われる人と同一化するのは難しい。文化的背景や民族的特徴、年齢、性別、職種などが同じもしくは、自分と似た人たちとのほうが同一化しやすいし、配偶者や子どもや友人など、近しい間柄の人であればなおさらである。同一化は共感の基本的前提であり、マウスでさえ同じゲージで飼われている仲間に対してしか痛みの伝染を見せないのである(De Waal 2009=2010:79, 117)。

ただ人間は血縁以外でも協力することがある。人間は時間をかけて成長し、成年に達するまでの長い期間を他者に依存しなければならない。そのため、血縁関係にない個体が協力して子どもを育て食事を与えることから大き

な利益が生み出される。結果として、食物の供給、子どもの養育、非協力者への制裁、敵対する隣人たちからの防衛、正しい情報共有といった協力的な戦略を維持できた集団の成員たちは、互いに協力しあわない集団の成員たちに比べて、非常に優位な立場に立つことができた (Bowles and Gintis 2011=2017:11)。

人間の社会は互惠的利他行動をもとにして成り立っていてもいる。こうした行動なしには、人間の社会は血縁集団を超えるような大きな集団を形成できなかった。あるいはその逆で、大きな集団を形成したからこそ、互惠的利他行動が必要になったとも言える (小田 2011:42)。

近年の研究において、人間の様々の利他行動が報告されている (Bowles 2016=2017:iv, 38)。二歳未満の子どもが手の届かないところにある物をとろうとする大人を見て、見返りがなくても夢中で手助けしようとするのが確認された。だが、大人の手助けをすることで見返りを得られた場合では、子どもたちが手助けをする比率は40%も低下したのである。他にも、ある実験で、ほとんどの被験者が、協力者を裏切ることによって大きな物質的利得を得ることよりも、相互協力を選好した。また他者のためにお金を使うほど幸せを感じるという研究結果もあり (川合 2015:181)、人間は与えることに喜びを感じるのであろう。

そもそも、人間が凶暴な生き物であるなら、お互いに殺し合って、もはや人間という生き物は絶滅していてもおかしくはない。すでに滅んでしまった人類の祖先の中にはそのような種の人類がいたかもしれない。かつての人間は、極端に暴力的な人を自分たちの社会から放逐してきたのかもしれない。攻撃性の高い人は子孫を残すことができず、攻撃性が低い穏やかな人たちのみ子孫を残すことができた。その結果、攻撃性の高い人は減少していった。これが自己家畜化仮説であり、自分たちを家畜のようにおとなしく品種改良してきたのである。

人間は排除されることを嫌う動物でもある。人間は食物や内集団のメンバーを略奪しようとするよそ者を排除してきた。人間は家族が協力して子育てをするので、周囲からの協力が得られなくなると子どもを育てることが難しくなる。そのため、集団から排除されることを恐れるようになった。この

ことは、人間が他者から排除されることにどれほど傷つくかということを示している (川合 2015:109-110, 129-130)

また人間は集団生活をする相互依存度の高い霊長類の末裔でもある。私たちは他人に頼ることなしに生きてはいけないのである (De Waal 2009=2010:37)。

このように、人間は共同、協力、共感し、利他的行動を好み、それゆえ現在まで繁栄してきた。また人間は、他者に頼り、他者の苦しみを辛く感じる動物なのである。これらの志向は平和をもたらすために重要な指標となろう。その利他的行動を単なる内集団ではなく、世界や惑星、宇宙にまで広げられるのが、今後の課題であろう。

おわりに

暴力の起源として、類人猿などの動物の行動を見てきたが、攻撃は動物一般に見られる行動であるのに対して、同一種間の暴力は主として人間に見られる文化的行動であった。類人猿は戦争をしないが人間は行うので、類人猿と人間の相違点に戦争の原因の一端が見られる。脳の進化や高度な社会性が戦争の原因の媒介をしている可能性がある。また言語の使用により抽象的思考が養われ、それに社会性が融合され、幻想の共同体を作るようになり、自己の生物的サバイバルのみでなく、集団的要請で戦うようになった。

戦争原因を人間の本能に求めることは、セブリア声明でも否定された。もし本能により戦争が起こるのなら、戦争は人間の宿命であり、平和への努力は無意味になってしまう。

そもそも戦争とは集団的な争いのことであり、個人間の争いは戦争とはいえない。さらに個人間の争いにおいても本能のみで争うのではない。初期人類や現在のいわゆる未開民族の中には戦争を経験していない集団があるのは、そのことを示唆している。

人間は共同、協力、利他を好み、だからこそ現在まで存在し繁栄してきたのである。戦争の原因を見つけ出し、それを取り除き、繁栄してきた様々な要因をもう一度見つめなおす必要があるだろう。

<注>

- (1) 直立二足歩行になった要因として、以下のような説があるが、まだ決定的なものはない(若原 2016:61)。①自分の体を大きく見せるため。②長距離を移動するため。③太陽光線を受ける面積を減らして、体温調節を有利にするため。④見晴らしのよいサバンナでいち早く捕食者を発見するため。⑤上肢(手)で武器を使用するため。⑥両手で食物を運搬するため。また直立二足歩行になったため、以下のようなデメリットも生じた(若原 2016:54-55)。①直立すると体重を支えるために骨盤が広く平板になりそれと引き換えに産道が狭くなり、難産になった。②脳へ血液を運ぶために大きな血圧が必要になり、高血圧となった。③血液が静脈系を通して体の中央に戻ってくる際に逆流防止の仕組みが必要になり、血栓ができやすくなった。④直立したため直腸静脈のうっ血が激しくなり、痔になりやすくなった。⑤直立した体の全体重を下肢で受け止めるため、腰と膝に大きな負担がかかり、腰痛と膝関節痛が生じた。
- (2) なお脳の大型化の理由は人類学者の間でも様々な説がある。脳はカロリー消費する器官であり、そのために肉食が必要となり、さらに脳が発達したとする肉食説や、二足歩行、労働、道具使用、気候変動、狩猟法、言語など関連する諸要件のどれに重きを置くかによって、意見は分かれている(小林 2008:32)。
- (3) なお、セブリア声明に対する批判として、以下のようなものがある。楽観的な平和主義のイデオロギーが、科学的な裏付けを二の次にしてしまうほどに全面に出ている。人間の極度の暴力性は、人間の本性に何ら由来するものではないと言い切ってしまうてよいのか(中島 2001:139-141)。
- (4) ただ今後、脳科学や遺伝子学などの研究が進み、本能ではなく違う概念によって、人間の暴力性がある程度解明できる可能性もある。人間の攻撃性は大脳辺縁系領域に集中しており、テストステロンというホルモンも攻撃行動と密接な関係があることが現在の研究で明らかにされつつある。ただどの人間がいつ暴力的な衝動を見せるのかは予測できず、いわんやどの時代、地域で戦争が生じるのかはこれらの科学では解明できないのが現状である(Keegan 1993=1997:98,99,101)。

<引用文献>

英語

Adams, David, 1989, *Disseminated by Decision of the General Conference of UNESCO at Its Twenty-fifth Session Paris*, 16 November 1989, (=1996, 杉田明宏他編集、中川作一訳『暴力についてのセブリア声明－戦争は人間の本能か－』平和文

化。)

- Alvarez, Walter, 2017, *A Most Improbable Journey: A Big History of Our planet and Ourselves*. (=2018, 山田美明訳『ありえない 138 億年史 宇宙誕生と私たちを結ぶビッグヒストリー』光文社。)
- Bowles, Samuel, and Herbert Gintis, 2011, *A Cooperative Species: Human Reciprocity and Its Evolution*, Princeton University Press. (=2017, 大槻久他訳『協力する種制度と心の共進化』NTT 出版。)
- Bowles, Samuel, 2016, *The Moral Economy: Why Good Incentives Are No Substitute for Good Citizens*, Yale University Press. (=2017, 植村博恭他訳『モラル・エコノミー インセンティブか善き市民か』NTT 出版。)
- Brodie, Bernard, 1973, *War & Politics*, Macmillan.
- Christian, David et al., 2014, *Big History: Between Nothing and Everything*, McGraw-Hill Education.
- De Waal, Frans, 2009, *The Age of Empathy: Nature's Lessons for Kinder Society*. (=2010, 柴田裕之訳『共感の時代へ 動物行動学が教えてくれること』紀伊国屋書店。)
- Diamond, Jared, 2014, *The Third Chimpanzee for Young People: On the Evolution and Future of the Human Animal*, Seven Stories Press. (=2017, 秋山勝訳『若い読者のための第三のチンパンジー 人間という動物の進化と未来』草思社。)
- Durkheim, Emile, 1895, *Les Regles de la Methode Sociologique*. (=1973, 佐々木文賢訳『社会学的方法の規準』学文社。)
- Eibl-Eibesfeldt, Irenaus, 1975, *Krieg und Frieden*, R. Piper & Co. (=1978, 三島憲一他訳『戦争と平和 下』思索社。)
- Freud, Sigmund, 1968, "Why War?" L. Bramson and G. W. Goethals eds., *War*.
- Giddens, Anthony, 1989, *Sociology*, Polity Press. (=1992, 松尾精文訳『社会学』而立書房。)
- Gustafson, Lowell, 2017, "Identity and Big Geopolitics," 中西治編『宇宙学と現代世界』地球宇宙平和研究所。
- Keegan, John, 1993, *A History of Warfare*. (=1997, 遠藤利国訳『戦略の歴史 抹殺・征服技術の変遷』心交社。)
- Klineberg, Otto, 1964, *The Human Dimension in International Relations*, Holt, Rinehart and Winston, 1964. (=1967, 田中良久訳『国際関係の心理』東京大学出版会。)
- Rodrigue, Barry H., 2017, "An Emergent Future: Evolving A Global Revolution," 中西治編『宇宙学と現代世界』地球宇宙平和研究所。
- Storr, Anthony, 1968, *Human Aggression*, Allen Lane The Penguin Press Ltd. (=1973, 高橋哲郎訳『人間の攻撃心』晶文社。)
- Tournier, Paul, 1977, *Violence et Puissance*. (=1980, 山口実訳『暴力と人間』ヨルダン社、訳者あとがき。)

Wright, Quincy, 1983, *A Study of War*, Second Edition, University of Chicago Press.

日本語

『朝日新聞』朝日新聞社、2015年3月13日。

石津朋之, 2004, 「戦争の起源と本質をめぐる試論」石津朋之編『戦争の本質と軍事力の諸相』彩流社。

伊藤武彦, 2001, 「攻撃と暴力と平和心理学」心理科学研究会編『平和を創る心理学－暴力の文化を克服する－』ナカニシヤ出版。

奥井一満, 1984, 「本能」『平凡社大百科事典』平凡社。

小田亮, 2011, 『利他学』新潮社。

加納隆至, 2001, 「人間の本性は悪なのか?－ビーリヤの社会からの検討」西田利貞編『講座・生態人類学8 ホミニゼーション』京都大学学術出版会。

川合伸幸, 2015, 『ヒトの本性 なぜ殺し、なぜ助け合うのか』講談社。

小林直樹, 2008, 「暴力考(Ⅰ)－人間学的視点から」『国家学会雑誌』121巻3・4号。

更科功, 2018, 『絶滅の人類史 なぜ「私たち」が生き延びたのか』NHK出版。

中島常安, 2001, 「攻撃と暴力の生物学的根拠と戦争神話－『暴力についてのセベリア声明』をめぐる－」心理科学研究会編『平和を創る心理学－暴力の文化を克服する－』ナカニシヤ出版。

中西治, 2014, 「はじめに」「ビッグ・ヒストリーとは何か」地球宇宙平和研究所編『ビッグ・ヒストリー入門』地球宇宙平和研究所。

山極寿一, 2007a, 『暴力はどこから来たか 人間性の起源を探る』日本放送出版協会。

山極寿一編, 2007b, 『シリーズ ヒトの科学 1 ヒトはどのようにしてつくられたか』岩波書店。

油井大三郎, 2004, 「世界史認識と平和」藤原修他編『グローバル時代の平和学1 いま平和とは何か 平和学の理論と実践』法律文化社。

ライト, クインシー, 1974, 「戦争」『ブリタニカ国際大百科事典』11巻、ティビーエス・ブリタニカ。

若原正巳, 2016, 『ヒトはなぜ争うのか 進化と遺伝子から考える』新日本出版社。